

大東文化大学合同研究会「大河内文庫を考える―大河内一男を中心に―」

第1部 大河内文庫創設の経緯及び文庫の特徴について

「大河内文庫創設の思い出」

大東文化大学国際関係学部国際関係学科教授・元図書館長（2007～8年度）柴田善雅

2007・2008年度の図書館長在任時期に、通常の図書館運営と関係会議参加のみならず、図書館規則の改正、東松山ホールのリニューアル等にもずいぶん時間を注いだ。学問的に最も大きな貢献ができたのは大河内暁男先生から、貴重文献を多数含む膨大な図書の寄贈を頂いたことである。この寄贈を受けた図書を大河内文庫と名付け、本学図書館が対外的に誇ることができる立派なコレクションとなった。寄贈をうけて大河内文庫を創設する経緯を、担当した図書館長として纏めておきたい。業務日誌「泪の館長日記」からその経緯を拾い集めて紹介する。

図書館館長職2年目にはいつの間もない2008年4月8日に大杉由香氏から自宅に電話が入った。本学名誉教授大河内暁男先生が歴大な蔵書の寄贈先を探している、今のところ暁男先生がかつて非常勤講師を務め、また奥様の勤務大学でもあった日本女子大学の図書館と交渉したが、それが不調に終わったらしく、本学図書館に寄贈の申し出がありうる、大河内家の蔵書は貴重書が多数含まれており、ぜひ本学図書館に収蔵したい。ただし数年前に大河内先生が本学図書館に寄贈を申し出た際に、それを蹴ったことで暁男先生がややお怒りになっており、館長柴田が大河内先生との関係を修復し、本学図書館への受贈交渉を行い、うまく纏めて欲しいという内容であった。大河内先生の蔵書にはスミス『国富論』等の貴重書や入手不可能図書が多数含まれているとの大杉氏の説明を受け、それを本学図書館に寄贈を受けるのが図書館長の業務と納得し、快諾した。大河内先生に小生から過日の図書館の対応の非礼を詫び、本学図書館への寄贈を陳情する書面を認めることにした。

ただし寄贈していただくとしても受け入れるスペースと図書のデータ登録作業の負担が重くなるため、受け入れ可能かを翌日図書館事務方に相談した。15千冊の図書を3年で登録処理するのであれば、図書館の予算の運用で何とかするとの回答を得た。登録予算が乏しいのであれば、小生と大杉氏とでほかの財源調達も考えていたが、それが不要となった。安心して大河内先生への寄贈陳情の文書に着手した。4月10日に大杉氏からのメールで、学長からも支援を取り付けるため、翌日学長室で説明するように手配を求めてきた。諒解して学長説明用の文書も作文した。内容は、寄贈図書用の建物の新設以外の条件は丸呑みし喜んでいただくというものであった。当然ながら蔵書データの登録後に目録を作成することになる。4月11日に学長室で渡部茂学長に説明したところ、学長も大いに乗り気で、専用建物新築以外には丸のみでよい、素晴らしいコレクションが本学図書館に収蔵されるのは喜ばしく支援を惜しまない、金銭負担が増えた場合には予備費で対応するとして賛意を得た。学長も過日の大河内先生に対する図書館の対応の拙さを知っていた。

4月28日に学長と再度打ち合わせを行った。大河内蔵書案件について、学長と鈴木一道経営学部長が大河内先生と面談し、大東図書館が受贈を受けることに決定したとして、大河内先生からの要望メモを受け取った。内容は、貴重書は別に保管、目録作成等、現金に

よる買い上げではない、評価額は 2 億円ほど。学長は以後の細かな交渉と作業は図書館長に任せるが、学長か図書館が大河内先生に感謝状を贈るのはどうかとの学長の提案に、他大学の事例も確認して何らかのことはしたいと説明した。さらに学長は、受贈作業では最初に図書館長が挨拶に行き、2 回目は運送業者を同行して見積もりさせることにしてはと提案し、その方針で臨むこととした。こうして大学の方針が決定したため、図書館事務部長に大河内家図書の寄贈を受けることがほぼ決まったため、資金繰りをつけるように依頼した。5 月 2 日に大河内先生宛に書面で陳情したうえで、同月 9 日にご自宅に電話し、事前相談のため同月 19 日に訪問することとした。

5 月 19 日に練馬区江古田の大河内邸を訪問した。大河内先生に本学図書館を代表し喜んで図書のご寄贈を受けると説明した。その際に大河内先生と以下の要点を確認し、併せて図書の概要について説明を頂いた。

- ① 図書群の名称を「大河内文庫」とする。
- ② まとめて板橋図書館書庫棟に配架し、閉架式で利用に供する。
- ③ 特に貴重書については別に貴重書資料室で保管する。
- ④ 分野ごとにある程度まとめて大河内先生が準備をしたうえで、大東文化大学に寄贈する。準備作業の目処をつけて 9 月に館長に連絡する。9 月以降、複数回に分けて大東文化大学図書館に移す。
- ⑤ 本学図書館の貴重書に該当する稀覯本を大河内先生が指定する。大東文化大学の図書館でも貴重書等の基準があるため、それに照らし合わせて分類する。
- ⑥ 図書館が『大河内文庫目録』を作成する。
- ⑦ 大河内一男先生が関わっていた政府の審議会関係の行政資料はすでに 10 年以上前に東大に寄贈済みであり、大東文化大学図書館に渡せるものはない。
- ⑧ ご自宅書庫以外にも、書庫が満杯で入りきれないため、3 割ほど別に保管してある。
- ⑨ 蔵書の分野
 - ・ 社会政策・労働関係 日本の社会政策・社会運動関係が多い
 - ・ 経済学説史関係 19 世紀の図書で今日では入手困難なものが多い
 - ・ 『国富論』関係 第 2 版以降は揃っている
 - ・ 経済史・経営史関係 学説史に比べれば経済史・経営史のよい本は少ない
 - ・ 消費家計調査関係 家計調査資料としてよく揃っている

その後、別棟の書庫に案内していただいた。書庫は薄暗く迫力があつた。ここには大河内家社会科学 80 年の歴史が凝縮されている。書架は木製で前後 2 冊が収蔵できるため、棚の段数よりもはるかに収蔵図書冊数が多い。大河内先生より貴重書に分類される図書の解説をしていただいた。スミス『国富論』は第 2 版以降が並んでいた。これだけ揃っているのは日本では東京大学経済学部だけであり、スミス旧蔵書等が市販された時にはグラスゴー大学か東京大学経済学部のいずれかが購入するようにしているのだという。『国富論』は 18 世紀後半の出版であるが、表紙の装丁がつつやつつやしていた。これは日本と違い英国では皮なめしの長い伝統があるため職人の技術が高く、皮が崩れないのだという。人権女神の像が印刷されているフランス語版『資本論』についても説明を頂いた。これはとても珍しい図書だという。そのほかイギリス社会思想関係の図書、日本の労社会思想と労働運

動関係の図書の紹介もいただいた。1 時間ほど書庫の中を案内していただき、大河内家の二代に渡る幅広い社会科学への関心を垣間見ることができた。これだけの立派なコレクションを本学図書館が収蔵できるのは光栄であり、大河内先生から書庫で貴重書を手に取りながら紹介をしていただいたのは図書館長ならではの役得であった。図書好きの小生にとって研究者冥利に尽きる得難い経験であった。大河内先生が搬出準備を終える 7 月以降に、図書館に連絡をいただき、搬出可能の部分から受領に伺うことにした。

図書館に戻り事務方に図書の分量、搬出方針等を説明した。大河内先生の準備ができた図書から搬出することになるため、2 万冊ほどを複数回に分けて運び込むことになる。貴重書のみ本館貴重書庫に運び、それ以外は最初から書庫棟に運び、仮置きして書庫棟で整理する方針とした。

6 月 13 日に図書受贈の件で学長に説明すると、図書館収蔵後にはこの図書を対外的にアピールすることを求められた。

7 月 19 日に第 1 回受領作業を行った。酷暑の中、図書館員を動員し、大河内先生の搬出図書群の指示を頂いたうえで、貴重書 10 箱とその他 40 箱ほどを搬出した。小生も軍手にエプロン・マスクで作業に当たった。大河内邸の書庫が大きいので書架の一部に隙ができただけで終わった。次回はもっと大量に運び出すことになる。

小生は 8 月 3 日～31 日に学生引率で上海に滞在し、学生の生活・学習等の指導・管理等に忙殺されていたが、同月 16 日に自宅からのファックスで大河内先生の奥様の訃報の連絡を受けた。大杉氏が奥様の訃報を自宅に電話連絡し、それをファックスで連絡してきたものであった。小生は御葬儀には参列できないが、すぐに図書館に電話して 18 日のご葬儀に図書館長名で花を贈るよう手配を求め、自宅に電話し亭主の代わりに妻に葬儀に参列するように指示した。大河内文庫に含まれている家計調査の図書資料群は家計調査の専門家の奥様の収蔵になるものである。帰国後に図書館からも 2 名の職員を派遣して葬儀のお手伝いをし、花代は大学予算で負担したとの報告を受けた。図書館としても失礼のない対応に努めたつもりである。

10 月 5 日に第 2 回搬出作業を行った。今回はナカバヤシに外注し 4 トンと 2 トンの 2 台のトラックで大量に搬出した。これにより大河内先生の説明では次回は幕末明治期の日本語図書を搬出する、自宅内にも図書がまだかなり残っており、全体の半分以上を越える分量を搬出したことになるという。

10 月 24 日に 25・26 日の両日に本学で開催された政治経済学・経済史学会の前日に、同会参加者に対し大杉氏が本学図書館の貴重コレクションの紹介を企画した。その案内役を館長柴田が引き受けた。板橋図書館内グループ学習室を使って、新たに収蔵となった図書館の誇る貴重書として、大河内文庫のスミス『国富論』第 2 版以降や人権女神像の印刷のあるフランス語版『資本論』等をテーブルに並べ披露した。小生は手袋を着用して見学会参加者の会員に貴重書を開いて本文点検していただいた。同学会の元代表理事原朗東京大学名誉教授と開催時代代表理事伊藤正直東京大学経済学部教授に紹介すると、素晴らしいコレクションだとお褒めの言葉をいただいた。この同学会への図書館貴重書の内覧会は図書館ウェブ広報誌『大東 BOOKS』第 7 号、2008 年 12 月でも写真付きで掲載し、対外的にアピールする機会とした。

2 回目の搬入作業で全体の分量がほぼ把握できたため、今後の予算措置等を試算したところ、10月31日に図書館事務方から、①図書の分量から2009・2010・2011年度の3年度で登録作業を行うが、それには2000万円ほどを要する、②目録を作成するのは2012年度以降の作業となる、③雑誌については別に製本作業が必要でその予算措置が必要となる、との説明を受けた。このスケジュールなら大河内先生にも納得していただけるだろうと安堵した。

2009年3月24日に第3回目の図書移動作業を行った。図書の受贈作業を次期館長の負担にしない方針とし、小生の館長任期終了直前によく、図書の移動作業を完了した。この搬出作業の際に大河内先生に本学からの感謝状を贈りたいと伝えると、諒解していただいた。実際にお届けするのは次期館長の役目となる。板橋図書館書庫棟1Fの移動書架に搬入した時点で大河内文庫の図書群となったが、書架を埋めた膨大な背表紙を眺めるとその分量で圧倒された。多くの図書館員の懸命の努力の甲斐あって、図書館長の任期満了直前に引き受けていた膨大な受贈作業を完了できたことで満足感が湧いた。

その後、板橋図書館は膨大な冊数の大河内文庫の整理を続け、蔵書・雑誌群の整理完了後に、成果として2013年3月に『大河内文庫目録』を刊行した。大杉氏から図書受領の交渉の依頼を受けてから5年近くの歳月を経ていた。この目録の他大学・研究機関への配布により一段とその存在を誇ることが可能となった。大河内先生は今も御壮健であり、この目録の出来栄に満足していただけたとしたら受贈を担当した元図書館長としても幸甚である。本学図書館が誇る社会科学系コレクションの大河内文庫が学内・学外の研究者に大いに活用されることを願っている。